

ゆあさ 湯浅町



三宝柑



なぎ

HPアドレス <http://www.town.yuasa.wakayama.jp/>



大仙堀

町名の由来

湯浅に人が住み始めたのは、今から5000年ほど前のことです。当時は、海が今よりずっと中まで入り込み、水（ゆ）が浅く広がっていたことから「ゆあさ」の名がついたとも、古名「温笠（ゆかさ）」から転じたともいわれています。

町章の由来

湯浅の「ユ」の文字を図案化したものです。全体の形は太陽の昇る状態（日の出）を象徴し、躍進湯浅を表現しています。円は和を意味し、図案の中心にあります。末広及び上昇角の部分は急速な発展を表しています。

町の紹介

和歌山県の中部西岸に位置する湯浅町は、周りを海と山が取り囲む自然環境に恵まれた小都市です。まちの歴史は古く、平安時代末期から活躍した土豪「湯浅氏」の本拠地として栄え、熊野参詣の重要な宿所の役割も果たしてきました。古くから漁業や農業が盛んでしたが、陸運・海運の要衝であったことから、特に商工業を中心に発展を遂げてきました。とりわけ湯浅を特徴づけたのは、鎌倉時代に伝わった金山寺味噌の製造過程から生まれたといわれる醤油の醸造です。江戸時代に入ると紀州藩の保護を受けて隆盛し、湯浅醤油はまちの代表的な産業となりました。

16世紀末頃、熊野街道の西方に開かれた古い市街地には、今も醸造業関連の町家や土蔵など、近世から近代にかけての伝統的な建造物が数多く残り、江戸時代から続く老舗醸造元からは醤油の芳香が漂ってきます。湯浅独自の歴史や伝統を今に伝える町並みは、我が国にとって価値が高いと評価され、和歌山県では初めてとなる国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。

湯浅町では「活力ある美しい町、誇れる町 ゆあさ」を目標に町民が主体となり、豊かな自然や特色ある歴史的景観を活かし、誇りと愛着を持てるまちづくりが進められています。

ひろがわ 広川町



ささゆり



あらかし

HPアドレス <http://www.town.hirogawa.wakayama.jp/>



稲むらの火の館

町名の由来

1955（昭和30）年4月1日、広町、南広村、津木村の1町2村が合併し、3町村を通じて流れる広川の名前をとって、町名を広川町に決定しました。

町章の由来

広川町の頭文字「ひ」を図案化したもので、図形は町民の和を意味し、明るく豊かで住みよい広川町を表現し、両翼は円形の部分つまり町民の和に支えられながら、明日に向かって果てしなく躍進し続けることを表したものです。

町の紹介

津波の被害から村や人々を守った世界的偉人「濱口梧陵」を生んだ町です。濱口梧陵は、戦前の尋常小学校第5学年用国語読本「稲むらの火」の主人公で、現在の耐久高等学校・耐久中学校の前身である耐久社の創始者でもあり、江戸時代末期から明治時代にかけて防災事業に身を捧げた人物です。安政の大地震津波時、稲むらに火を放ち、多くの村人を救った濱口梧陵の功績は、現代に通じる津波防災の象徴として広く語り継がれています。濱口梧陵の偉業と精神、教訓を学び受け継いでゆくため、2007（平成19）年4月、濱口梧陵記念館と津波防災教育センターから成る「稲むらの火の館」が誕生しました。

広川町は、海・山・川と三拍子そろった美しい自然環境に恵まれたまちです。そこで、町域全体を一つの公園とみなし、自然景観、歴史的景観に加え、町民が暮らす日常生活環境を整備し、町民が公園のような環境の中で、快適に生活できるまちづくりを進めます。「美しく快適な緑のまち・クリーン&グリーン広川」を基本理念とします。

- ①美しく快適な生活環境づくり
- ②安心して暮らせるまちづくり
- ③いきいきとした活力のあるまちづくり
- ④豊かな心と文化を育むまちづくり
- ⑤みんなの手によるまちづくり